

## 2009年度、M J E T 植林ツアーの記録

8月29日～9月6日

### 目次

要約	2
はじめに	2
1. 植林ツアー実施の概要	2
2. 植林日誌	4
3. Than Sin Kye Village への太陽光発電装置の提供	10
4. 交流会	10
5. 観光	11
6. 植林ツアー体験記	16
7. 植林ツアー後記	33
付録： 1 植林ツアー参加者	34
2 植林ツアーの日程表	35
3 写真集	36
4 植林地図	39
5 Than Sin Kye村地図	42
6 Bagan 地域地図	43

## 要約

目的	ミャンマー中部乾燥地域の緑化に貢献するために、バガン郊外の村において、ミャンマー青少年と一緒に植林するエコ・ツーリズムを実施する。
期間	2009年8月29日から9月6日まで
参加者	学生14名、社会人5名、計19名
植林の場所	Thant Sin Kye 村の共有地と小学校の敷地
成果の概要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ヤンゴンのミャンマー日本仏教徒青年協会の会員と交流会を開催して、相互の理解と親睦を深めることができた。</li> <li>2. Thant Sin Kye 村の共有地と小学校の敷地において、村の青少年と一緒に、計1215本の樹木を植林することができた。</li> <li>3. 村の人達と一緒に植林し、交流会を行ったことによって、お互いの理解と親睦を深めることができた。</li> <li>4. バガンの雄大な遺跡およびポパ山近郊の寺院、風物、地場産業とビルマ料理を十分楽しむことができた。</li> <li>5. ヤンゴン市内にある、日本が協力した、5つの施設を視察して、援助が役立っていることを確認することができた。</li> </ol>

## はじめに

植林ツアー参加者19名（男性11名、女性8名）は、村人と共に、5日間で2,000本の植林を行う予定であったが、途中で帰国する人が7名に達し、2,000本を5日間で植林するには、やや困難が予想された。また、パートナーのThe Nature Lovers Group のU Aung Dinがアメリカに渡航してミャンマーに不在となったので、やや心配な出発となったが、専務理事の U San Thu Kyawが同行し、僧院からもDaw Thin Thin Yi およびU Moe Thwin Myint と U Kyaw Zaw Htooの3人が同行することになり、村人とのコミュニケーションを円滑に進める手筈を整えることができた。MJETは出発前に2回の勉強会と1回のオリエンテーション開催し、特に交流会の準備として、全員で盆踊りと歌の練習を行い、ヤンゴンにおいても、直前まで、練習を行った。

### 1. 植林ツアー実施の概要 （神田）

#### (1) 植林地の概要(神田)

- ・植林地：ミャンマー国, マンダレー管区 Thant Sin Kye (Kon Sin Kye)村（別図参照）  
同村の3箇所、約1haに1215本、5樹種（Kokko、Mazali、Tamar, Teak, 1、Yinmar）を植樹
- \*A：僧院隣接地、3400m<sup>2</sup>、404本
- \*B：旧小学校跡地、4500m<sup>2</sup> 507本
- \*C：第28小学校構内、2500m<sup>2</sup> 304本
- 計 10,400m<sup>2</sup> 1,215本

表1 植林実績(2009年度)

植林地 樹種	僧院隣接地 (9月1日)	旧小学校跡地 (9月2日)	小学校構内 (9月4日)	計
Kokko	—	146本	99本	245本
Mazali	—	143本	89本	232本
Tamar	—	140本	73本	213本
Teak	404本	45本	20本	469本
Yinmar	—	33本	23本	56本
合計	404本	507本	304本	1215本

## (2) 植林の方法

- ・ Nature Lovers Group(代表 U Aung Din)が、小学校校長、Than Shue Kyi村の代表者と協議し、植林地を設定。林業省から苗木1350本（Kokko:250、Mazali :250、Tamar:250、Teak :500、Yinmar:100）を入手現地（旧小学校跡地）に搬入準備。
- ・ NLGが、住民に依頼し、予め予定地に、2.5M間隔で、植林用の穴（深さ30cm、径50-60cmを掘り準備（別図参照）

## (3) 3グループによる植林

- ・ 植林参加者は、予め3班（Melon班、Mango班、Pineapple班）に分け、各植林班長が植栽を指揮し、班の取りまとめを行った。
- ・ 予備日(8月31日)に、植栽穴の配置図が準備されていなかった、僧院隣地と旧小学校跡地の配置図を作成。
- ・ 僧院隣接地は、Teakのみ植栽が予定されていたが、旧小学校跡地と第28小学校構内は、作成した植栽穴の配置図と用意した樹種の数をもとに、出来るだけ5種の樹種を混栽するように、植栽予定図を作成し、植栽日に各植林班長に手交した。
- ・ 植林図と植林関係者リストは別図（Pagoda site, Old school, School site）を参照。

## (4) ミャンマー青年とのパートナーシップ

- ・ 9月1日に関係者（MJET,NLG,植林参加者、ヤンゴンの日本語学校参加者、小学校関係者、村長他の村関係者、植林を行う村の青年男女）が第28小学校に集合。
- ・ 同日に、「植林参加者」と「村の青年が男女」ごとにパートナーを形成、以後、協働して植林を行った。
- ・ 9月1日に、僧院隣接地、9月2日に旧小学校跡地、9月4日に第28小学校構内で植樹を行った。いずれも、植樹後の水やりは、村の小学生や子供たちが積極的に手伝った。旧小学校跡地には、小学校脇の水道水のコンクリート製の貯水槽(2008年にMjetが寄贈)の水をとった方形の移動用の鋼鉄製の水槽（おおよそ1.2mX2.0mX1.2(高)程度）が配置されており、これを活用した。
- ・ 作業の終了後、子供も交えて、班ごとに集合写真をとるなど交流を深めた。

## 2. 植林日誌

### (1) Melon グループ 植林日誌 (総括：真鍋；植林係：前村)

メンバー：真鍋 希代嗣、波多野伸俊、前村 ゆう、鶴籠 絢子、松山知夏、  
野口彩、藤村建夫

Yu Maemura

東京大学大学院 新領域創成科学研究科  
国際協力学専攻 修士課程 2 年

The actual planting of the trees proved to be quite a challenging task. As there were many specific jobs to complete before the actual planting, deciding on the ways to go about completing the necessary tasks proved to be difficult.

By far the first day was the most challenging, as we were all trying to get a grasp of the process. There were some mix-ups as to which areas we were responsible for and the number of plots recorded on the paper and the actual holes in the ground. It would have been better if the team leaders confirmed each team's responsible areas before they all got to work. After confirming the number of holes, we proceeded to plant the trees quickly. However, we soon realized that it would be hard to keep track of who (which partner) was planting what tree, and the nametags would become a problem.

Each team had to figure out an efficient way of recording the tree number, the type of tree, the name of the donor, the name of the partner in the correct spot. This was a rigorous trial and error process that led to many failed attempts and some coordination failure.

This led to a much better second day, which we realized that if we made the tags before hand the planting process would go much smoother. Our team divided the number of trees evenly amongst the members, and recorded all of the information before hand. We also put them into the laminate sleeves and prepped the tags so that they could be attached to the tree immediately after planting. Each member with their 20 (approx) tags laid out the tags next to the holes, and we asked our partners to place the correct type of plant according to the tags next to the hole. After all of the trees were in place, we planted the trees in our respective areas (the trees tagged with our partner's names).

One challenge was keeping track of the help being offered. Many of the children were very eager to help, and so some tasks we were not yet ready for would be completed without our knowing. For example, even though we had not confirmed the tree numbers, or the names of the partners, some of the locals attached the tag onto the wrong trees. This had to be redone and cost time. Managing the help with and clearly communicating the game plan is very important to a smooth process.

By far the most time costing mistakes were born out of poorly planting the trees. Instructions on how deep the hole should be dug, how much soil should be on top etc. were poorly understood by the majority of team members and partners. This lead to the replanting of over half of the trees, and undoubtedly doubled our working time. There were significant inconsistencies in the instructions across the 3 teams, and the presence of an expert would have been very valuable.

## (2) Mango グループ植林日誌 (総括：熊谷；植林係：中条)

メンバー：熊谷宣樹、赤木升、佐藤麻美、中条真帆、神田道男、

マンゴーグループは神田、赤木、中条、佐藤、熊谷の5名からなる。神田氏は全体の植林の取りまとめを行わなければならなかったため、マンゴーグループの植林活動は植林担当である中条さんを中心として行った。現地の若者と2人1組ペアになり、事前にプロットして確認をした場所に木を植えていく。初日は、木を植えるための穴が全体的に浅すぎるという問題が生じた。コンポストの部分がほぼ、むき出しとなっていて、このままでは水をうまく吸収できずに枯れてしまう恐れがある。これをペアの人に伝えなければならないのだが、コミュニケーションがうまくいかず、何度もやり直すこととなってしまった。

次の日は、前日の反省をふまえ、事前にしっかり説明をしてから行った。前日より作業はスムーズにいった。しかし、コンポストを埋めるという発想よりは、コンポストの周りに土を盛るという傾向がマンゴー班のパートナーにみられた。このままでは、水をかけたときに周りの土が溶けてしまい、やはりコンポストがむき出しになってしまう。

最終日はこのような失敗を日本人、村人お互いが学習して一番良い植林作業が出来た。全体的にやはり、コミュニケーションの問題が顕著にみられた。村の人々はビルマ語以外はほぼ話すことのできない状況なので、お互いに作業を進めるときはジェスチャーを交えながらやることになる。しかし、穴の深さや手順といった細かい点になると、ジェスチャーだけではやはり限界がある。ただ、ポイントとなる用語はある程度限られているので、植林用のビルマ語フレーズ集などを作り事前に勉強しておく、当日の作業がよりスムーズになるように思われる。いずれにしても、マンゴー班はお互いに困ったときは助けあって、無事に植林作業を終えることができた。

## 植林日誌 （中条）

8/31Mon

午後、村に到着。植林サイトを視察後、穴の数を数えて、植林マップを作る。

9/1Tue

パゴダ前サイトにチークのみを植える。初めてミャンマー人パートナーとペアになって作業を始める。僧院の交流会で覚えた「私の名前は・・・」を早速披露するも、ミャンマーの方々の名前は難解で、各ペアパートナーの名前を覚えるのに手こずる。初めての植林だったので、苗を植えた後でラベル付け、通し番号、植えた人の名前の記録などを行い、作業効率が良くなかった。昨日数えた穴以上に、昨日午後～今日にかけて、村人が新しく穴を掘っており、植える数が予定より増えた。

9/2Wed

Old Schoolのサイトに4種の木を植える。昨日の経験を活かして先にラベル作りをしたが、どの種類の木を植えるかのマップが一つで、ラベル作りに時間がかかった。木の種類によって植え方に規則性があるのなら、木の植え方は各班に任せてしまっても良いかもしれない。今日は日本側の自分の名前が入った木もあるので、作業により熱が入る。土が固く、煉瓦が多く出てきたため作業は難航。また2日目で、作業に慣れてきたかと思いきや、環濠が小さい、植え方が浅い、といった条件を満たしていない箇所が多くあり、植え直しをしたため、割と時間がかかってしまった。日も前日より射したために、けっこう働いたゾという満足感。一堂、そろそろ「暑い」「疲れた」「休憩」等のカタコトミャンマー語を使えるようになり、コミュニケーションもスムーズに（?）。

9/4Fri

午前中で前日の午前・午後1日分と同じ本数を植えなくてはならなかったのに、少々気が急いた。とはいえ、より焦っているのはミャンマー側のように、早く植えてしまおうと何度もせかされた。先日の経験を踏まえて、ペットボトルを使って、環濠の大きさと深さを統一するように努めた。深さ20cm、縦横70cm四方と頭では分かっているけど、土を掘るうちに、もういいかな、と適当になってきてしまうので、このような基準があると分かりやすい。この日は時間がなかったが、急がば回れで植え直しが無いように丁寧に植えたところ、3日間のうち、最も速くかつうまく植えられたように思う。植える自分たちが作業に慣れてきたことも大きかった。この日も土が固く、深く掘るのは難しかったが、パートナー以外の村の人々や校長先生、子供たちが協力してくれて、随分と助かった。前日にラベル作りを済ませておいたことも手伝って、無事予定本数を植え終わり、ヤンゴンへの帰路に着いた。

## その他

- 欲を言うならば、掘るためのスコップや鋤がもう少し多くあれば、作業がよりはかどると思われる。今回は各ペアに掘る道具が一つしかなかったため、必然男性が掘る係となってしまった。特に土が固い場所ではかなり男女で労働の差があって、少々申し訳なかった（男子日本人、女子ミャンマー人のペアでは、もちろん日本人男性陣が奮

闘されていました)。

- 村の人は英語が通じなかったので、こちらのカタコトミャンマー語とジェスチャーのみという、ほぼ会話なし状態であった。それにもかかわらず、パートナーと組んできちんと植林ができたのは、村の人のやる気と協力があつたためと思われる。何より、各班にビルマ語専攻の学生と、日本人学校の門下生がいたことで、適宜情報共有が可能となり、スムーズな作業に結びついた。マンゴー班のミンミン（熊谷君）、チョーさん、どうもお世話になりました。また、ツアー外から助っ人に来てくれた小暮君、島野君の両名にも助けられました。ありがとうございました。

### （３）Pineapple グループ植林日誌（総括：小林；植林係：鈴木）

メンバー：小林 宗太郎、鈴木俊康（植林係）、木村明弘、佐伯裕里、  
木村彩子、水越由布子、福永喜朋

#### 植林日誌（木村彩）

9月1日（鈴木）植林場所：パゴダ周辺

まず、学校でペアの方と対面。ビルマ語でコンニチハと名前を名乗ることしかできないのでそれ以上のコミュニケーションがとてもとりづらく苦労しました（この苦労は植林が終わるまで抱えることに…）。その後、植林した木に付ける札を学校で作成。ペアの名前、木の名前（チーク）、日付、ドナー名、木の管理番号記入するのですが、どこに何番の管理番号の木を植えるかは明確ではなかったので、管理番号以外のものをあらかじめ学校で記入しておきました。このとき私たちの班は、植林する本数に対して札の枚数が少なかったため、札を半分の大きさに切って対応しました。いざ作業を始めると、穴を掘って植える作業自体は覚悟していたよりもきつくはなくスムーズに進んでいました。流れとしては、木を植え、植えたところに番号の書かれていない札を置いていき、一通り木を植えたら置かれた札をビニールに入れていくというものでした。

しかしうちの班は前述のとおり、紙を半分の大きさにして作業をしていましたが、結局もとの大きさではないとダメということになりもとの大きさの札に全て書き直しながら作業をしたので、かなり時間をロスしてしまいました。また、この時点でも管理番号が確定していなかったので、確定次第番号を書き、札を木にくくりつけていく予定でしたが、その点に感じて意思疎通がはかれておらず、番号を書いていない状態で木にくくりつけて作業が進められており、番号を書くときに全部外してからやるというかなり無駄に手間がかかってしまいました。それでも、一通り作業を終えましたが、木の植え方に問題があり、掘り返したり穴を広げたりしなければならず二度手間になったり、ペアの名前を書いていた人がおり、その札も全てやり直しになったりなど、本当に無駄に時間がかかってしまい、他の班の方々に申し訳ないような状態で1日目は終わりました。

9月2日（鈴木）植林場所：旧小学校校庭

この日は前日の反省が生かされ、事前に番号まで札に記入しておき、植える前に札をくくりつけ、さらに作業前に植えたの簡単なレクチャーもあったので前日に比べスムーズに作業がはかどっていきました。また、目安となる穴に番号を振った紙を置いておいたので、植える場所がずれたりということもなかったです。しかし、深いところにレンガが埋まっている穴もあり、穴が深く掘れずに植える場所を変えるたりというアクシデントもありました。また、私の感想として、すでに生えている大きな木の根元や垣根のそばに植林用の穴が掘られていており、そこに植えた木ははたしてきちんと生育するのだろうかというのが疑問でした。

9月4日（木村・彩）植林場所：現小学校校庭

植林最後の日。この日は東京大学の男子がすでに帰国しており、パイナップル班は植林係を含め、中心になって動いてくれた男性3人の戦力が抜けた状態での取り組みとなった。他の班に後れを取らないよう、メンバー一同気合を入れて作業に臨んだ。

植林の場所は、現小学校の向かって左側にあるスペース。植林は一人当たり9本～16本である。二日目同様、ラベルはすぐ木に括り付けられる状態にまで用意してある。三日目ともなり、要領を得てきて、村の人たちとも大抵のことは阿吽の呼吸で作業を進めることができた。

村の方々は、パートナーだけでなく、学校の子どもたちや先生方も積極的に作業に参加して下さった。特に、子どもたちが楽しみながら進んで手伝ってくれたことが印象的だった。また、こちらの作業の間違いが発覚しても、責めることも無く、最大限のフォローをしてくれたりもした。例えば、（以下、私個人の話になってしまうが、印象的だったので記録しておく）最初、私は自分の列の植林ナンバーを反対側から数えてしまい、並べた苗の順番が逆になってしまった。幸い、植える前に他メンバーから指摘され気付くことができたが、全て並べ直すしなければならず、しかも直している過程で、なかなか数が合わない、という状況に陥ってしまった。臨時とはいえ植林係にも関わらず、間違った指示を出してしまい、村の人にも迷惑をかけ、非常に悔やまれた。しかし、村の人と他メンバーのヘルプで、なんとか乗り越えることができた。その後もロスした時間を埋めるべく、パートナーが作業をスピードアップしてくれたり、子どもたちが一生懸命手伝ってくれて、私も気持ちを切り替えて作業に臨むことができた。その甲斐もあり、比較的早めに作業を終えることができた。

植林を終えると最後は水やりである。途中まではホースが届いていたが、植林場所の南半分はとどかず、貯水タンクからバケツで水を運んでの作業になる。私のパートナーは、植林を終えてヘトヘトにも関わらず、重いバケツを進んで受け取り、最後まで水やりをやり抜いてくれた。ツアーが終わっても、ずっと継続するパートナーの水やりの労力を、少し



でも削減するために、何らかの設備投資がもっと必要なのではないかと感じる（ジョウロさえひとつしか見かけられなかった）。

植林終了後、村のcommitteeと藤村さんで話し合いが行われていた。村の人たちの話を聞くと、やはりメンテナンスについて不安が出ているように感じられた。今回、3日間、19人で1200本を植林したとのことだが、単純計算で一人当たり60本。パートナーは、学業や、家の仕事の合間にメンテナンスに取り組まなければならない、負担はかなり大きいと想像される（パートナーだけに任されるのではなくチーム制になるとのことだが）。植林された木々の管理は今後committeeに任されるということだが、そもそもの水源が充分か（生活用水だけで限界なのではないか）、水やりの労賃が実際に作業している人にいきわたるのかどうか、動物避けのフェンスなど設備先払いは可能なのかどうか、不安・疑問は残る。特に乾期に入る前に各問題に対処しないと、今回のツアーによる植林が無駄骨にもなりかねない。今後、いかにcommitteeと継続して連携をとり、状況を共有し、問題を共に解決していくか、が課題となる。十分な活動体制をお願いしたい。

### 3. Than Sin Kye Village への太陽光発電装置の提供（福永）

#### (1) Than Sin Kye Village における太陽光発電ニーズ

- 1) 9月3日2009年、9:00時より地元小学校の教室を借りて、小生が小学校教師12名と村の有志5名を前にして、当方の本プロジェクトの趣旨を説明して理解を求めました。
- 2) 本プロジェクトのねらいは、公共給電施設のない発展途上国の村落に小規模照明設備を提供し、村民のQuality of Life 向上を目指すもので、活動資金は世界からのDonorsによる慈善事業により遂行されるプロジェクトであります。即ち地元村民は無償で、70w/戸のLED電灯がともされます。夜の生活が活性化します。
- 3) 地元小学校教師と村の有志は、208家族全体にぜひ、供給して下さいとの切実な要望が出されました。

#### (2) 緊急のニーズに必要な発電

- 1) 先ず、小学校の集会室、6.5x13m=84m<sup>2</sup>に照明設備を施し、夜間のLocal Community Meeting の場を提供し、村民のQuality of Life向上に貢献したいと考えております。
- 2) 次に、村の各戸に順次照明設備を提供します。TVが見たい方には規模を拡大して提供出来ます。

#### (3) 当方の提案

- 1) 世界からのDonorsを募り、とりあえず150,000USDを集め、小学校及び村の208家族の内50家族に照明設備を提供したいと考えています。
- 2) 2010年3月には実現したいと考えております。
- 3) 技術的問題は今後検討します。

### 4. 交流会

#### (1) MJBVAとの交流会（松山）

8月30日、午後15時ごろより交流会が始まりました。植林ツアー参加者全員が浴衣を着用し僧院へ向かいました。

ビルマの民族衣装を着た生徒たちがお出迎えしてくれ、僧侶のあたたかい歓迎のお言葉、続いて藤村先生よりお言葉があり交流会はスタートしました。私たちと僧院の生徒の出し物が交互に発表されました。まずは僧院の男子生徒による歌「大きなのっぽの古時計」がバイオリンの伴奏で披露されました。黄色と赤の色鮮やかな民族衣装を着た男子生徒2名による踊り、中国系の武道の型の披露、また裾の長い民族衣装を着た女子生徒6名と男子生徒1名の歌付の踊り、と続きました。発表の前の日本語での説明もとても分かりやすく上手でした。

私たちの出し物は、まずはツアー参加者全員による盆踊り（東京音頭）、そして木村明広さんによる空手の型の披露、最後に参加者による日本の歌4曲の披露（「崖の上のポニョ」「世界に一つだけの花」「手紙～拝啓 十五の君へ～」「サライ」）を行いました。木村さ

んの型披露は観客を魅了する完成度の高いものでした。「世界に一つだけの花」は知っている学生もいた様子で口ずさむ姿も見受けられました。個人的には、私が詰まりながら拙いビルマ語で曲の説明をしましたが、生徒たちは笑顔でとても温かく受け止めてくれました。

全ての出し物が終了した後に、僧院の生徒たちと私たち日本人との会話の場が設けられました。ビルマのお茶菓子が用意されリラックスした穏やかな雰囲気の中で交流することができました。ビルマの生徒たちは日本の浴衣に関してなど多くの質問を積極的に日本語でしてくれました。多くの生徒たちにまた来年も来て欲しいと言われ素直に嬉しい気持ちになりました。

最後に藤村先生より優秀な学生5人に奨学金が手渡しされました。全員で集合写真を撮り交流会は終了しました。

交流会全体として、生徒たちの穏やかな笑顔と真っ直ぐさがとても印象的でした。これはこの僧院での経験に限ったことではなく、ビルマのどこに行っても人々の温かさに触れられました。私はこの点がビルマの大きな魅力の一つだと思います。

## **（２） Than Sin Kye村民との交流会 （佐藤）**

Than Sin Kyeでの交流会では、夕方に開催したにも関わらず、予想以上に多くの村民が参加して下さり、また途中雨が降ってしまうというアクシデントに見舞われながらも、村民の方々の温かい拍手を頂きました。

交流会は短い時間ではありましたが、私たちを温かく迎え入れて下さった村民の方々へのお礼の気持ち、そして日本の文化に触れてもらいたいという気持ちを少しでも伝えることが出来たのではなかと思っています。

## **5. 観光**

### **（１） バガンの遺跡（波多野）**

バガンは、11～13世紀にかけて栄えたといわれるパガン王朝の都である。当時、4000もの仏教建築物が建てられたといわれ、現在も2000をこえる遺跡が残る。1990年代後半、ユネスコの世界遺産リストへの申請が行われたが、法整備などの面で管理が不十分とされ、登録には至っていない。しかし、その規模は他に類を見ないものほど巨大なものであり、また、乾燥した気候のため、遺跡内部の壁画等の保存状態もよい。登録は逃したとはいえ、パガンの遺跡の価値は極めて高く、東南アジアを代表する遺跡であるのはたしかである。そして、このような遺跡をいかした観光産業が現在のパガンの主要産業の一つとなっている。

今回のツアーでは、「アーナンダ寺院」などパガンを代表する遺跡を訪れた。なかでも、深く印象に残っているのは、内部に釈迦の遺髪が納められているといわれる「シュエサンドー・パゴダ」だ。遺跡の上から望んだ、夕焼けに染め上げられたパガンの遺跡は、まさ

に息をのむほどの美しさであった。

しかし、遺跡の美しさはさることながら、遺跡を巡っていて気になったことがあった。それは、その遺跡がどういったものであるかを説明する解説板がほぼ設置されていなかったことである。なかには、遺跡の入り口付近に、ミャンマー語による解説板が置かれたものもあった。しかし、日本語はもちろんのこと、英語などミャンマー語以外の言語で書かれたものは全く見られなかった。我々のツアーには、ガイドがいたが、自転車で遺跡を巡っているような個人旅行者を考えると、ガイドブックがなければ、その遺跡が、誰によって建てられ、どういった背景をもつものなのか、もしかすると、自分が見ている遺跡の名前すら分からないなんてことも考えられる。遺跡などの文化遺産を観光する際、こうした情報の有無は、観光客の満足度を左右する重要な要素となってくる。たとえば、極端な例ではあるが、外国人観光客がなんの予備知識もなく奈良の法隆寺を訪れた場合、「世界最古の木造建造物」といった単に建物を見るだけでは分からない遺産の背景情報についての説明をされるのとされないのでは、観光客が法隆寺を見るまなざしも、見学したことで得られる満足度もかなり異なるに違いない。今後、パガンにおいて観光産業の更なる発展を図るためにも、英語表記の解説板の設置や、遺跡を紹介するパンフレット類、宿泊施設や、交通拠点における充実を期待したい。

観光は、地場産業の育成や雇用の創出につながる裾野の広い産業である。ただ、その反面、観光地の運営はその舵取りが非常に難しいとされる。観光客の嗜好の把握は容易ではなく、また、たとえその増加に成功しても、過度の集客は遺産の破壊につながり、貴重な観光資源を短期間のうちに消耗させてしまうことにもなりかねない。まず、観光客に、遺跡をよく知ってもらい、興味を抱いてもらうことが、マナーを心得たりピーターの増加といった、観光客の質的な向上へつながり、ひいては、観光地の持続的な運営に貢献するものと考え

## （２） ポパ山と地場産業（椰子酒、漆塗り）（木村彩子）

### ①ポパ山、タウン・カラッ

植林をしている村から、バスで二時間ほど走った所に、標高1518mの死火山、ポパ山がある。標高が高くなるにつれて、乾燥したカラカラの白い大地が徐々に緑に覆われ、山頂付近は動植物の豊かな森が広がっていた。途中、国営の植物園を訪れた。ミャンマーには貴重な植物種が多く、種の組み合わせによる新しい薬草の開発が期待されている。植物園には、アロエなど身近な草から、見たこともない種まで、種々様々な薬草が栽培されていた。

植物園の一角からは、ポパ山の麓にあるタウン・カラッが一望できた。タウン・カラッは、737mもある巨大な岩峰で、頂には寺院があり、地上から気の遠くなるような長さの階段が螺旋状に延びている。階段の数は780段。ミャンマーの他のパゴダと同様、靴を履いて登ることは許されない。さらなる試練は、隙あらば何か奪おうとする猿の群れ。バスから降りて目的地に向かうメンバーの顔も引き締まっていた。

タウン・カラッは国内外の観光客で大変な賑いを見せていた。所狭しと土産物屋が並び、息つく間もない雰囲気だ。ただひたすら頂上を目指す。それでも、30～40分程登ると、頂上に辿り着くことができた。頂上からは、日本ではまず目にすることができないような大パノラマが広がり、疲れは一気に吹き飛んだ。

■写真1：植物園から望むタウン・カラッ ■写真2：椰子の木に登って実を採る地元の人



## ②地場産業

ポパ山の帰りに、椰子酒とラッカウェア（漆の塗り物）の土産物屋を訪れた。

### ②－１．椰子酒

タウン・カラッからしばらく行くと、高い椰子の木の並木が続く場所に出た。並木のすぐ傍に民家があり、そこで椰子の実から酒を造り販売していた。酒のアルコール度は高く、石に酒をかけ火を付けるとメラメラと燃えあがった。水と割って口にすると、甘くまろやかで意外と飲みやすい。お土産に一本買うことにした。酒瓶は、市販の瓶を竹の編みこみでパッケージしたもので、手作りの風合いが出ている。

外では椰子の木に登って実を採る実演を披露してくれていた。まずはツアー参加メンバーがチャレンジ。しかし、半分も登りきらないうちにギブアップ。途中で縄梯子がびたりと幹にくっつき、どこにつかまれば良いのかわからなくなるようだ。次に地元の人が登ると、何も難しいことはないというように、スイスイと登り切り、器用に手を離し実をゲット。これも地元の人ならではの技術である。

### ②－２．ラッカウェア（漆塗り）

バガンの村落内に、ラッカウェアという、器や腕輪などの竹細工に漆を塗る伝統工芸品の工場（こうば）がある。作成の現場を見学しながら、作り方を説明してもらえた。

ラッカウェアの素材には、竹や馬の尻尾の毛などが使われている。土台ができると、漆を塗り、地下室で数週間保存し、形を整え、さらに漆を塗り…ということを繰り返して丈夫で艶のあるラッカウェアが作られるそうだ。一つ完成するのに半年はかかるそう。

もうひとつ驚いたのは、装飾の技術だ。大量生産の商品は機会で絵柄などが自動的にプリントされるのだろうが、ラッカウェアはひとつひとつ、職人の手作業により絵柄が彫られている。スラスラと下絵も無いのにナイフを滑らせると、魔法のように細やかな美しい絵柄が生まれていく。土産物の裏にプレゼントする相手の名前などを彫ってくれるように頼むと、名前だけでなく像や花までサービスしてくれた。

■写真3：LACQUERWARE WORKSHOP, “U BA NYEIN”



### (3) JICA支援によるプロジェクト（鵜籠）

2009年9月5日、JICAプロジェクトの視察をさせていただき、以下の6箇所を訪れた。

#### ①New Yangon General Hospital

病院の設立や運営に関するお話を伺った後、病棟内を案内していただいた。病室の他、治療室や研究室も見学した。日本の支援による機材なども見せていただいたのだが、それらの中には、昔支援され現在はあまり使われていないものもあったし、最新の支援によってもたらされ活用されているものもあった。このような例を実際に見たことで、時間の経過とともに需要が変化していることなども実感できた。

#### ②University of Nursing (UON)

看護大学の運営、教育に関する方針などに関するお話を伺った。

男性の入学人数が決まっているなど、日本の体制とは異なる点についても聞くことができ、興味深かった。

#### ③Planetarium

プラネタリウムの施設を訪れ、お話を伺った後実際に15分程度鑑賞した。乾季と雨季のある地域であるし、このような施設がより普及すれば、教育面などあらゆる場面において役立っていくかもしれない。

#### ④Youth Training Center (YTC)

VIP観覧席や客席から競技場全体を見学した後、実際にフィールドの中にも入ることができた。ミャンマーの人々で場内が沸いている様子を思い浮かべながら、日本のプロジェクトが国民の

結束や活気を生むことにもつながっていたら幸いだと感じた。

#### **⑤Thuwunna Bridge**

あいにくの雨であったが、橋の入り口まで行って参加者全員で記念撮影を行った。

#### **⑥Bridge Engineering Training Center (BETC) , PW, Thuwunna**

昼食を頂きながら、これまで手がけた橋梁の事例に関して、スライドショーとともにお話を伺った。日本の技術がいかされながら、デザインなど随所にミャンマーらしさも取り入れられていることがわかった。帰り際には参加者全員にミャンマーの素敵なお土産を下さった。

半日でこれだけ多くのプロジェクトを見学でき、非常に充実した時間を過ごせた。詳しい説明を聞きながら現地の事例を見て回れる機会はなかなか得られないし、参加者は少なからず国際協力に関心を抱いているので、それぞれにとって貴重な体験となったはずだ。現場視察で各々が感じたことは、今後の各自の活動に確実に反映されていくだろう。

## 6. 植林ツアー体験記

### Melon グループ「ミャンマーな日々」

真鍋希代嗣

東京大学大学院 新領域創成科学研究科

国際協力学専攻 修士課程2年

植林初日。私たち日本のツアー参加者は、ミャンマーの学生たちと協力しながらも、初めての植林に四苦八苦していました。植林には2時間の昼休みが用意されており、私たち日本人がくつろいでいるところに、共に植林を手伝ってくれているミャンマー男子集団が勢いよく現れ、サッカーに誘ってくれました。ツアーには予定されていなかった、まさかの日緬ガチ・サッカー対決です（ミャンマーは漢字で緬と表記する）。かつて、ビルマ軍も日本からの独立を求めて日本へ挑んできたらしいです。試合は、慣れない裸足の痛さやジーンズの走りにくさに苦しめられながらも健闘し、結果は1-1の同点。まずまずの善戦です。善戦の要因は、途中でゴールキーパーとしてMJET会長の藤村先生を投入したことでしょう。

植林二日目。元気なミャンマーっ子達は当然、この日もサッカーを挑んできます。連日の植林や飲み会、もとい、交流会で蓄積された疲労もあり、二日目は1-2で負け。二日間の成績は1敗1分けでした。敗戦です。そういえば、かつて日本軍もアウンサン將軍率いるビルマ国軍に敗れました。どうやら歴史というものとは繰り返されるようです。

およそ植林とは関係なさそうな話ばかり展開していますが、これらの課外活動も実は植林ツアーの醍醐味の一つなのです。植林ツアーの魅力は何か？それは植林以外のところにあると思います。植林はあくまでもきっかけであり、そこから生まれるミャンマーの学生たちや、ツアー同行者との交流がこのツアーの魅力だと思いました。普通に旅行をしていたら、日緬ガチ・サッカーも実現しなかったでしょう。あれ程、大人げもなく走り回って汗をかくこともなかったでしょう。植林を通じて絆を深めていたからこそあれほど盛り上がったのだと思います。

一人ひとりの名前を挙げることはできませんが、ツアー中にお世話になった皆様、おかげで存分に楽しむことが出来ました。ありがとうございました。

そういえば、大事なことを書き忘れていました。このツアーに参加した学生にとって大事な決まりが一つだけありました。——「アツい」と言ってはならない。もし言ったら罰金1,000チャット。軽い気持ちで始めたゲームでしたが、皆これにかなり苦しめられることになりました。気がつけば3日間で36,000チャットが集金ボックスに納められていました。あれ以来、いまだに「アツい」という言葉を発することに抵抗感を覚えてしまう日々が続いています。あー、そんなミャンマーな日々が懐かしいです。

38,000チャットの使い道ですが、植林でお世話になった小学校に寄付してきました。



## 植林ツアー体験記

波多野伸俊

筑波大学大学院、人間総合科学研究科

修士課程1年

光輝くシュエダゴン・パゴダ、サクラタワーの上から見たヤンゴンの夜景、日本とはひと味もふた味違ったミャンマーカレー。ミャンマーでの経験のひとつひとつ、そのいずれもが貴重な思い出であるが、何よりも心に残っているのは、やはり、Than Shi Key村での植林作業であろう。

「植林」と聞き、当初、私は用意された苗を植えるだけの比較的安易な作業を考えていた。しかし、実際作業をしてみると、乾燥したパガン地方で、少しでも長く水を保つための壕の掘り方や、細かいことになるが、一本一本の木に付けるドナーを書いたラベルの効率の良い作成など、体はもちろんのこと、想像以上に頭を使う作業であった。そんな植林作業のなか、印象深いのは、現地のパートナーとのコミュニケーションについてだ。作業初日、ペアが決まり、さっそく作業をはじめたが、話かけようにも、何も口から出てこない。というのも、片言の英語を話せる人もなかにはいたが、私のパートナーはミャンマー語以外話せなかった。黙々と進みすぎた初日の作業を反省し、ビルマ語の会話帳をたよりに、片言どころか本当に片手で余るほどであったが、2日目以降は、ビルマ語を覚えて臨んだ。結局のところ、最後まで「あなた」「暑い?」「疲れた?」程度の表現しかできなかったが、わずかでも言葉でコミュニケーションがとれるようになってから、パートナーとの距離はぐっと縮まったように感じた。試行錯誤の多かった植林作業だが、その分、最終日の午前中に、予定通り作業が終わったときの達成感は、この上なく大きなものとなった。

全体を振り返ると、パートナーだけでなく、Than Shi Key村の子供たちや学校の先生、また、ヤンゴンの僧院でのMJBPAの学生との交流、そして、ツアーをコーディネートしてくれたポーさんやモーさんなど、今回のツアーには、通常の旅行ツアーにはない、多くの人々との触れ合いがあった。また、それが、今回のツアーの醍醐味であったと思う。よく、その国を知るためには、その国の歴史や風土もさることながら、実際にそこに住む人々をよく知り、仲良くなることが大事だと言われるが、そういった意味で、今回のツアーへの参加は、ミャンマーという国を知るための近道であった。正直なところ、これまで「ミャンマー」に対しては、ぼんやりとしたイメージ（それもあまり良いとはいえない）しかもっていなかったが、今や、私の持つ「ミャンマー」の持つイメージは、クリアな輪郭を持つようになった。

最後になるが、パガンの遺跡の上から望む朝焼けと夕焼けはとても美しかった。自分の植えた木と、あの景色に会いにもう一度ミャンマーへ行きたいと思う。

## “Myanmar Trip”

Yu Maemura

東京大学大学院 新領域創成科学研究科  
国際協力学専攻 修士課程 2 年

Our trip to Myanmar was an extremely valuable, eye-opening, wonderful and fun experience. All of the staff member's hospitality was absolutely amazing and the trip would have not been as unforgettable without all of their sincere help. The schedule allowed us to see some of the great sight-seeing locations of Yangon and Bagan, but the free time also allowed us to explore the sights and sounds of the local city and experience Myanmar for ourselves. Shopping in the markets, eating the local food and mingling with the citizens was personally the most interesting part of the trip.

The friendships that were built with the villagers of Bagan will also be an experience I will treasure for the rest of my life. Getting together with the locals and completing a mutual task can create a very strong bond with someone even across language barriers. My partner Myo Zar Ni and I had too much fun teaching each other how to count, complaining about the heat, getting our hands dirty in the ground and talking about our families. I cannot help but smile thinking about the trees that we both planted together, growing in the village by the elementary school.

Some days I felt the schedule was quite harsh, with very little free time in between activities. One day I remember we woke at 4:30am and minus traveling time had only 30 minutes (approx.) of free time until the evening. The tree planting was a huge challenge and much time was wasted trying to find the best way of going about the process. However, working together to overcome the challenges was good for the bonding of team members and should be valuable feedback information for future tours. I booked my flight separate from the tour and managed to find an amazing deal, yet I would have found it very difficult to pay 140000 JPY to go on the trip. I think that price would be too high for me to participate. All in all however, the trip was amazing and an unforgettable experience that I would definitely wish to participate in again.

## 植林ツアー体験記

鵜籠 絢子

東京大学大学院 新領域創成科学研究科

国際協力学専攻 修士1年

アジアの国の経済や環境の変化に興味を持っていたが、実際に訪れたことがなかった。東南アジアの中でもなかなか行く機会がないであろうミャンマーで、首都ヤンゴンと乾燥地帯のバガンを訪れて多くの人と出会えることは他にない大きなチャンスだと思い、このツアーに参加した。

ヤンゴンに到着した直後から、都市としての活気、観光スポットの多さ、観光客、特に日本人観光客に対する意識の高さなど、自分のイメージと異なっていた多くのことに驚かされた。ヤンゴンの中心部に位置するホテル周辺では、日中から夜間にかけて歩道に所狭しと市場が展開されており、賑やかな地元の人々の生活をとても近く感じた。

バガンでの植林は現地の学生と2人1組で行った。機械的に進めていくものかとイメージしていたが、思っていた以上にパートナーとの連携が必要であった。私のパートナーは英語がほとんど話せなかったが、「暑い」、「(土が) 固い」、「疲れた」、「終わり」など使用場面から想像できるビルマ語の単語だけでも楽しく作業することができた。また、子供との出会いが今回のツアーの中でも特に深く印象に残っている。植林の敷地であった小学校の学生はみな笑顔で力いっぱい手を振ってくれたし、植林中にも近くで遊んでいた近隣の小さな子供たちが大勢手伝ってくれた。よく日に焼けた屈託のない笑顔で人懐こく手を繋いできたり、自分たちの遊び場に手を引っ張って連れて行ってくれたり、持っているお菓子を食べさせてくれたりと、私たちを「外国人」や「大人」として敬遠することなく受け入れてくれた彼らの存在によって、より一層ミャンマーを親しみ深く感じることができた。

最終日にパートナーに短い英語のメッセージを渡したら、彼もミャンマーの文字でメッセージを書いてくれた。ビルマ語専攻の友人に読んでもらいながら、私も簡単な文章だけでも学びたいと感じた。会話として交わしたのはシンプルな言葉のやり取りだけだったが、彼らと過ごした3日間は本当に楽しくて、心から彼らに出会えてよかったと感じた。ツアーをサポートして下さった方々や、年齢の近かったパートナーや小学校の先生とは住所を交換したので、写真を送ったり近況を報告したりするなど、今後も連絡を取り続けたいと思う。そして、ぜひもう一度ミャンマーを訪れて彼らに会いたい。

余談だが、私はヤンゴンでもバガンでもインターネットセンターを利用した。時間帯によっては通信速度が遅いこともあったが、問題なく日本と連絡がとれるし、インターネットセンターの受付の人と顔見知りになって会話もできたので、思いがけないところでいい体験ができるものだった。

今回のツアーで、ミャンマーは日本人にとってとても居心地のいい土地だと感じた。今後日本人の訪問先としてもっとポピュラーになってほしい。

## 植林ツアー体験記

---

松山知夏

東京外国語大学東南アジア課程

ビルマ語専攻4年

大学でビルマに関して勉強したとはいうものの、自分の日常生活と接点が少ない上に危ない国というイメージを強く持っていたため、ビルマ語専攻でありながらミャンマーに行ったことはありませんでした。この度タイミングよくこの植林ツアーの話を聞き、これを逃す訳にはいかないと強く感じ参加を決意しました。

初めてのミャンマー訪問では目にするもの全てが印象的でした。まず、空港に着いたときのあのなんとも言えない独特のにおいや、ゲートの外で人がごった返している映像はとても衝撃的でした。街中に黄金に輝くパゴダ、信仰心が厚く穏やかな人柄、ゆったりとした時間の流れ、などビルマには私を魅了するものがたくさんありました。中でも目が合うと必ず微笑み返してくれるビルマの人々の穏やかさには心から癒されました。

今回のツアーのメインイベントである植林は非常に有意義なものでした。村の人々の熱烈的な歓迎と協力で圧倒され、子どもたちの人懐っこさと真っ直ぐな笑顔に心打たれました。私とペアになった男の子はとてもシャイで、慣れない植林作業にはじめはどうしたらいいのか分からず困惑した様子でしたが、私のたどたどしいビルマ語に耳を傾けて一生懸命に作業をしていました。2日目以降は作業も効率良く進み、神田先生の計画書や藤村先生のご指導のおかげで順調に取り組むことが出来ました。植林作業は子どもたちが積極的に手伝ってくれ、村の人々の優しさに包まれた和やかな雰囲気の中作業が進みました。ビルマ人の国民性をじかに感じる事ができた貴重な体験となりました。

今後は自らが植えた木の成長を見守っていきたいと思うと同時に、また機会があれば是非参加したいと強く思っています。

個人的にはこのツアーを経てビルマ語に対するモチベーションが非常に高く上がりました。もっと現地の人々とコミュニケーションしたいと心から感じ、残り半年の中で最大限に語学を身に付けたいです。

## 植林ツアー体験記

野口 彩

ミャンマー日本・エコツーリズム

初めてのMJETツアーへの参加。初のミャンマー訪問で団体旅行ということもあり、どんな旅になるかなと、期待とともに飛行機に乗り込んだ。仕事の都合上、植林は1日だけの旅程となったが、旅を終えての結論から言うと、新鮮な体験が出来て非常に面白かった。一般企業で働く社会人にも、日常から少し離れたよい気分転換の機会になるのではと思った。

### ミャンマーの印象

人々は宗教熱心で親切。ユーモアもある。歴史、仏教美術を学ぶと更に仏塔・遺跡巡りを楽しめると感じた。

### 植林体験

バガン到着日の植林サイトの視察で、日本と比べ、苗木が育つ条件が如何に厳しいかを感じた。汗をかきながら実際作業に入ると思いのほか真剣になれ面白かった。ただ植え方があっているのか不安が残ったので、初日だけでも植林の専門家を各チームに迎える事が出来れば作業には安心かと思う。今は育成記録が届くのを楽しみにしている。

### 植林パートナーとの協働、村人・小学校との交流（植林サイト）

言葉の壁があったが植林パートナーは非常に友好的で、1を伝えると倍の理解で作業を進めてくれた。現地の言葉が話せたら、MJET計画についての意見、環境に対する意識を聞いてみたかった。村の人々は昼食の炊き出しをしてくれたり、彼らの生活を垣間見ることが出来、通常の観光ツアーでは得られない体験であった。また、心が温まる機会になった。

### 僧院との交流会

自分の母国語を勉強してくれているのは嬉しい事である。帰国後、一緒に会話をした女の子達に手紙を出した。そして旅行に同行してくれたThin Thin Yeeさん達にはとても感謝している。彼らのサポートのおかげで充実した旅となったと思う。

### MJETパートナー：Nature Lovers のサポート

個人予定のアレンジメントにも応じてくれ、とても親切であった。将来、MJETツアーが増員しても準備を整えれば、受け入れ体制としては特に障害はないのではと感じた。

### 参加メンバーとの交流

学生メンバーの行動力はプログラムの内容を富ませてくれた。自身が学生時代に考えていた事、感じていた事を思いだす良い機会にもなった。また、MJET正会員のプロフェッショナルな経験・見解を伺い、視野を広げる事ができた。

「ミャンマーに木を植えに行く」

熊谷宣樹

東京外国語大学大学院、  
言語学科、修士課程 1 年

藤村会長と出会ったのが去年の11月、ひょんな出会いで今年の4月からMJET学生部の代表となってしまった。正直、ミャンマーで植林とは何ぞやという疑問があった。僕の印象ではミャンマーはそれほど緑の少ない国という印象がなかったからだ。そんな疑問を抱えながらも、総勢19名でいざミャンマーへ行くこととなった。

ヤンゴンで交流会をおこなった翌日、バガンへ到着。いよいよ植林活動が始まる。これから、計4日間の植林作業が行われる。(1日の休みを含む)今回の植林活動の拠点となるタンシッチェー村へ行き、小学校で打ち合わせを行い、次の日に植林活動を実際に行う場所を確認した。

次の日、植林開始。基本は日本人とミャンマー人の二人でペア(男女)を組み、植林を行ってゆく。これはなかなか大変な作業だった。自分はある程度ビルマ語を勉強してきたので、それなりに自信はあったが、自分が言いたいことを伝えるのは難しかった。

「浅く掘るのは駄目、もっと深く！！コンポストを壊さないように！！」  
なんて表現、いままで表現したことはなかった。ましてや、ビルマ語を一切勉強していなかったひとたちにとってはそれはもう大変だったと思う。正直、自分だけでやった方が早いのでは？と思うときが多々あったが、出来るだけコミュニケーションをはかるように努力した。しかし、それでも、ふと気がつく、パートナーがいなくなってしまうとき何回かあった。このような様々な問題をかかえていても、最後には以外と何とかなるのである。最終日は、村の子どもたちが肥料を運び、植林も前日までの学習効果で、予想以上に効率よく植林作業を終えることができた。

このように、今回の植林ツアーは僕にとっては学ぶことが非常に多くあった。自分が最初に抱いていた「なぜミャンマーで植林？」という疑問は実際に参加してみて解けた。ミャンマーは今「雨期」である。中心都市ヤンゴンではゲリラ豪雨とでもいえるほどの雨が一日になんども降り、地面がいつも湿った状態であるが、中央乾燥地帯であるバガン地方は、確かに強い雨が降るときはあるのだから、降り終わったあとはすぐに乾燥してしまい、水がたまらないのだ。やはり、実際に現地に行ってみて初めて分かる問題というものは結構たくさんある。

そして、僕にとってのこのエコツアーの最大の魅力は「人と人との交流」だと感じた。ミャンマーの人々の心の温かさというものは、ツアーに参加したみんなが感じていたことだろう。最後はみんな、ビル狂(ミャンマー大好きな人)になっていた。

また、現地の人々との交流もそうだが、日本から参加人々にもさまざまな大学や年代の方々

毎日さまざまな話をして交流を深められたのは自分にとっては本当に貴重な経験だった。僕たちがミャンマーにいて植えてきたものはたくさんの「木」。しかし、僕たちはミャンマーでたくさんの「思い出」も植えてきたのである。来年、再来年と、この「思い出の木々」がすくすくと成長し、ミャンマーと日本の心に豊かな緑が宿りますように。

## 植林ツアー体験記

赤木 升

東京大学大学院、新領域創成科学研究科、  
国際協力学専攻、修士課程1年

6種の中から正しい苗木をパートナーに選んでもらっているとき、ふと思った。

「自分は逆の立場になったとき分かるかな。」

乾燥地バガンといっても、木がまったくないわけではない。結構、その辺に木は生えている。しかし、数百年前に比べ、伐採され減っているため、植林の必要があるらしい。もちろん、見るからに乾燥化が進んでおり、また、生物多様性の観点からも必要性は僕にも理解できる。

でも、思う。じゃあ東京と比べたらどうだろう。僕の家近くより明らかに木がある。何より、自然と近いところで生活している。その証拠に、僕は家の周りにある木なんて、見ても銀杏ぐらいしか分からない。もっと真剣に東京、日本の森林のことを考えないと、数百年後にはマンマーから日本への植林ツアーが組まれてしまうんじゃないのか。さすがにそれは言い過ぎにしても、もっと自分の足元を見直さなきゃいけない気がする。これからは、地元で行政やNGOがやっている自然、環境への運動にも、少しは参加しよう。

そんなことを考えていたら、僕のパートナーが他の人のパートナーに何か指摘されていた。どうやら、苗木を間違えたみたいだ。やっぱりどの国でも苗木の種類はみんなが分かるものではないようだ。少しほっとした。

## 植林ツアー体験記

佐藤 麻美

東京大学大学院、新領域創成科学研究科、  
国際協力学専攻、修士課程1年

これまでに体験したことのない植林、そして訪れる機会がないであろうと思っていたミャンマー。この2点を理由に、純粹に「面白そう」という思いから参加した私でしたが、今回の植林ツアーでは予想以上に様々な体験、そして思い出を得ることが出来ました。ツアーの目的は植林でしたが、藤村先生の計らいにより、植林だけでなく様々な観光地へも訪れることが出来、その名の通り植林&ツアーを満喫させて頂きました。また、ヤンゴンでは日本語を学んでいる学生と、そして植林地であるバガンでは村の人々と交流をもつことが出来たことで、短い滞在期間ではありましたが、ミャンマーという国をより身近に感じる事が出来ました。

ツアーのメインである植林。事前の勉強会の段階では、植林とはいうものの用意されている木を植える作業のみを行うのかと思っていました。しかし、実際に現地に行ってみると、土を掘る作業から行う必要があることがわかり、結果として、土を掘ることから最後に水をあげるという一連の作業をすべて体験することとなりました。作業を始めた当初は要領も掴めておらず、また乾燥地で植林をする際の留意点もきちんと把握していなかったことから、時間ばかりが掛り、全部の木を植え終えることが出来るのか不安でした。ところが、数をこなし、土はどれだけ掘ればいいのか、植林パートナーとどのように連携したら効率よく進むのかなどを感覚で捉えられるようになるに従い、作業時間が短縮されていき、また植え方も統一されていき、最終日にはそれが身をもって実感できたことが何にも勝る達成感でした。

また、植林中には小学校の先生に始まり、生徒、村の子供たちがパートナーでないにも関わらず、積極的に手伝ってくれ、女の子は野花や髪止めをくれた子もおり、隔たりなく接してくれたことがとてもうれしく、感謝の気持ちでいっぱいでした。ただ木を用意された穴に植え、水をあげる、という作業だけでは、ここまでの思い出にはならなかったと思います。

サブメインであった観光ですが、ミャンマーで有名であるパゴダには驚きました。首都のヤンゴンにあるものは煌びやかで、その大きさ、そして訪れている地元の人の多さに驚きましたが、遺跡地であるバガンではパゴダのあまりの多さに驚かされました。同じパゴダではありましたが、それぞれの都市でのパゴダの見方がありました。特に、藤村先生のお勧めであったバガンのパゴダの上から見る夕焼けは格別でした。また、観光だけでなく、食事も体重を気にしてしまうほど、美味しいものばかりを食べ、フルーツやフルーツジュースも日本で食べるよりも大きかったり、味がいいものばかりでした。

ミャンマーと聞くと、私はアウンサンスーチーさんしか思い浮かびませんでしたが、今ではミャンマーを思い返すと、滞在中に関わりを持つことのできた人々、パゴダ、ヤンゴン・バガンの風景、そしておいしい食べ物が思い浮かびます。

藤村先生、今回は貴重な体験をさせて頂き、本当にありがとうございました。



## 植林ツアー体験記

中条真帆

東京大学、大学院、新領域創成科学研究科  
国際協力学専攻、修士課程2年

アジアを旅行したこともない私にとって、ミャンマーは全くの未知の土地でした。しかし、「ミャンマーで植林をしよう！」という木村君の誘いに便乗して参加した私は、思いもよらずたくさんの楽しい経験をさせていただきました。

何といってもバガンの村での植林が思い出に残っています。大学院で国際協力を学んでいる私にとっては、実際にフィールドに出て汗を流すことは最も貴重な体験でした。しかも、記念植林的なものでなく、3-4日かけて自ら鍬をもって土を耕して木を植えること、その過程で村の人とパートナーになって働くこと、チームの仲間と協力して工夫を重ねることなど、これらの体験をじっくりできたことが良かったと思います。今後のメンテナンスなどまだまだ困難な点もあるとは思いますが、ミャンマーの村まで行って自分の手で木を植える、このことが学生である自分にとっては（もちろんどの参加者にとっても）、一番素晴らしい経験だったと思います。

また藤村先生のお計らいで、ミャンマーの観光スポットをたくさん回れたこともこのツアーの魅力の一つでした。黄金に輝くシェーダゴンパゴダを浴衣でお参りしたり、雨のヤンゴン市街をサクラ・タワーから見下ろしたり、悠々と流れるエーヤワディー川の岸でライム・ジュースを飲んだり・・・みんなでたくさんの観光が出来て本当に楽しかったです。何より、どこまで見渡しても無数にそびえるパゴダの合間を縫って、人々が今も暮らしているバガンの遺跡群の様子がとても印象的でした。遺跡好きの私にとっては、最も高いパゴダに登って、沈む夕日を静かに眺めた、あのときの幻想的な風景は忘れられません。その名のごとく植林＋観光（ツアー）を満喫した10日間でしたが、両者をしっかりと結びつけ、さらに思い出深いものにしてくれたのが、僧院での交流会や初日から同行してくださったNature Loversのポーさん並びに、日本語学校の門下生の皆さんなど、ミャンマーの方々との交流であったと思います。これは単なるスタディーツアーや観光旅行では味わえない醍醐味でした。ミャンマーの皆さん、本当にお世話になりました。

ミャンマーのことをほとんど知らなかった私ですが、今回の植林ツアーで心理的な距離がぐっと縮まりました。今回のハイライトでは回れなかった部分を求めて、再びミャンマーを訪ねてみたいと思います。一緒に行ってくれた参加者の皆さん、ミャンマーの皆さん、そして何より藤村先生、楽しい旅と思い出をどうもありがとうございました。

植林ツアー体験記

小林宗太郎

東京大学大学院、新領域創成科学研究科、  
国際協力学専攻、修士課程2年

今回、友人に誘われての参加となった。正直、決心したのはその場のノリであったが、それが正解であったと現在は思う。

私は、他のメンバーより1日遅く（大学の友人とは2日？遅れ）ミャンマー入りした。迎える車の中、右ハンドルで右車線を走っている車に違和感を持ちながら、他のメンバーとの合流場所に到着した。そして食事。うまい。

その後さっそく僧院へと赴くこととなった。歌、踊りなどの披露、そして交流会。現地のお菓子などを食しながら、いろいろと話した。お互いに頑張って交流しようと試みたが、なかなか思うようにはいかない。少しへこたれる。お互いに歌や踊りを披露しあうだけでなく、折り紙のようにお互いにコミュニケーションをとりながら行えるプログラムがあればもっとよかったかと思った。

翌日、バガンへ。ヤンゴンと違う景色。特にパゴダの上からの景色は最高であった。全体を見渡すと木がまばらにある程度。まあ話通り、予想通り。ここで、モノ売りの子供と話した。なんと12ヶ国語も話せる、と。正直、自分がいかに甘えた環境に身を置いているのかを改めて考えさせられた。

植林はトラブルもあり、いろいろと気が疲れた。が、大変だったのはそれ以上に言葉。ビルマ語を全く話せない上、英語もほぼ通じない。こんな経験は正直初めてであった。「諦めたらそこで試合終了だよ」というありがたい言葉が頭の中をぐるぐると回る。そして、共同作業しながらなんとかコミュニケーションをとろうと試みた。でもなかなかうまくいかない。こんなときはどうしたらいいのかを考えさせられた。

話は少し脱線するが、バガン→ヤンゴン間の飛行機の席がFREEと記載されていた。こんな経験はおそらくもう一生ないだろうと思った。

最後に。今回、スケジュールの件や現地での態度など、藤村先生にはご迷惑をおかけしたにもかかわらず、帰り際温かく見送ってくださり、大変感謝しております。ありがとうございました。

## 植林ツアー体験記

鈴木俊康

東京大学大学院、新領域創成科学研究科、  
国際協力学専攻、修士課程1年

途上国へ行くのは今回が初めてだったので、食事や宿泊施設など色々なことを覚悟して行ったのですが、思いのほかどれもクオリティが高く、非常に楽しくミャンマーで時間を過ごせました。

そのような中で最も印象に残ったのは僧院での交流会でした。交流会に参加していたミャンマーの学生達は日本語をだいぶ話すことができたので交流していて楽しかったですし、きちんと『交流』できているなと感じました。また、彼女たちは日本にも興味がかなりあるようなので、日本に来る機会があれば是非また会って今度は私達が迎えてあげられたらいいなと思いました。

しかし、交流会の出し物が私たちは全て日本のモノだったことは改善すべきだと感じました。盆踊りはともかく、日本語の歌をあんなに何曲も歌うのではなくビルマ語の歌を歌うというのがあってもよかったのではと。ミャンマーの学生が日本語の曲を歌っていたので特にそう感じました。

また、もう1つ特に印象に残ったのは今回のツアーのメインである植林です。これは悪い意味で印象に残ってしまいました。植林の手際が予想外に悪かったからです。1日目の失敗から2日目にはだいぶ改善されていましたが、まだ改善できると思います。それと、全体に対してしっかりと作業の内容が伝わっていなかったり、植林の仕方がそれぞれ異なったりというのでさうとう時間を無駄にロスしてしまったと思うので、やはり事前にしっかりと先生自身から支持をするべきだと感じました。それが無理なら事前にメールで添付されてきた実施要綱に植林の作業に関する情報も付加すべきだと思います。

それと、元々木の日陰になっているようなところに木を植えているのにも疑問を感じました。わざわざ木の根が張っているところに穴を掘り、そこに木を植えてもその木が淘汰されやすいのは当然なので、穴を掘るのは現地の方ですがその指導もしっかりするべきだと思います。

以上のような不満？のようなものもありましたが、全体としてとても満足のいくツアーでした。日程の途中での帰国の融通を利かせていただいたり、食事に気を使っていたり、非常に個人的に助かりました。今回のツアーの主催者である藤村先生および運営に関わった方々に感謝です。

## 植林ツアー体験記

木村 明広

東京大学大学院、新領域創成科学研究科、  
国際協力学専攻、修士課程2年

軍事政権下のミャンマーという暗いイメージとは裏腹に、初めて降り立ったヤンゴンの地は、近隣の東南アジア諸国と何ら変わらず、自然と人々の笑顔で溢れていた。東南アジアの他の諸国の人々とミャンマー人との違いは、物乞いが少なく、買物の際も値段をふっかけてこないという点である。あまり観光地化されていないためか、非常に好印象であった。また、友人が女性もののロンジー（ミャンマー人が日常身にまとう民族衣装）を着用した際、町中が爆笑の渦になったのも、ミャンマー人の愉快的な性格を垣間見た一幕であった。

さて、本ツアーの主題である植林について、私が抱いていた思いは、環境に優しいという正の側面だけではない。植林事業の負の側面は、植林後の木を育てるのは、現地の住民であるという点である。農作業にしても、畑を耕して種を植えるだけなら、そこまで大きな負担ではない。植えた種に継続的に水を与え、愛情を持って育て上げることが、何より労力のいる仕事である。植林事業も、ともすれば先進国の人間の自己満足によって、現地の人々の負担を増やすだけの作業になりかねない。

しかし、今回の植林ツアーは、上記の批判はあたらないと思う。なぜなら、我々のことを現地の人々が大いに歓迎してくれたからである。毎日美味しい食事を用意してくれる校長先生、優しい笑顔で微笑みかける植林パートナーの高校生たち、嬉しそうに自分達のビルマ語や遊びを披露し、別れの際は何度も何度も手を振る子供たち……。乾燥地帯で木がなく、保水が困難な土地とはいえ、彼らがどれほど木を切望しているかは依然不明である。木を植えた後も継続的に関与して欲しいと望むあたり、彼らの本来の目的は植林ではないかもしれない。しかし、植林を通して外国人と交流することが彼らにとって喜びであることは強く理解できた。

植林作業自体は、非常に有意義なものであった。既にある程度の穴があったとはいえ、穴を掘って木を植える作業は容易ではなかったがやりがいを感じた。さらに、現地パートナーとの交流や植林中のおしゃべり、子供たちとの触れ合いが強く印象に残っている。特に印象的であったことが二つある。

一つ目は、現地の人々と我々の体の作りの違いである。現地パートナーは、軍手も使わずふしだらけの鍬を駆使して、炎天下の中、ほとんど水も飲まず汗もかかず作業を行っていた。一方、私は鍬を握れば肉刺ができ、水を大量に消費して汗だくになりながら作業を行った。二つ目は、政治の話を色々聞いたことである。ミャンマーは軍事政権であり、政治犯を捕らえて拷問している。亜鉛水を飲ませる拷問は、獄死や解放後の入院につながっているらしい。2007年の僧侶によるデモの後、大量の秘密警察が町に散らばり、多くの市民が屋外での政治的話題を避けたという（普段はよく政治の話もしているらしい）。一方、軍政は学生を何より恐れ、大学を地方に分散させて学生同士の結集を防止しているという。ミャンマーの新しい側面を垣間見ることができて興味深かった。

植林ツアーでは、ポパ山から見た壮大な景色や遺跡から見た日没、踊りや湖を背景に頂いた食事、ふかふかのベッドやプール付きの素敵なホテル、仲間と盛り上がった思い出など、記述したい内容は枚挙にいとまがない。紙面の関係上ここでは割愛するが、どれも素晴らしい経験であった。最後に、藤村先生をはじめ、このツアーを企画して下さったM J E T 役員の皆様に深く御礼申し上げたい。そして、もう一度参加させて頂きたいと心から願う。

## 植林ツアー体験記

佐伯祐里

東京外国語大学大学院

総合国際学研究科、地域・国際専攻

地域研究コース 修士1年

今回は初のMJET植林ツアーでしたので、予定通りに全て植林を終え、全員が無事に帰国したことだけでもこのツアーの成功と言えると思うのですが、この植林ツアーでは普通の旅行ではなかなか味わえない、たくさんのよい経験ができました。

まずは、植林ツアーですので、ツアーの参加者との協力関係なしには成り立ちません。その過程で、大学間を越えた交流、また人生経験の多いMJET会員の皆様のお話を聞くことができ、とても有意義ものになりました。また、植林を通して地元の村の人々と触れ合えたこと、観光に関しても全てが充実していました（藤村さんお勧めスポットに行けたことや、浴衣でシュエダゴンパゴタに行ったり、看護学校、プラネタリウム、運動場見学など、貴重な体験ができました。）。

反省する点があるとすれば、植林のパートナーとの意思疎通が難しかったです。それもいい経験ですが、私のビルマ語も十分ではなく、言語が通じないというのは難しかったです。また、植林の初日はいろいろな情報が飛び交い、うまく伝わらず二度手間になることが多かったです。これは3日目には解消されていましたが、次回は初日からできると、もっとスムーズに行くでしょう。また、日本での事前の勉強会や打ち合わせで、もう少しツアー参加者同士の顔合わせができていると、役割分担や企画をもっと盛り込むことができるのではないのでしょうか。

最後に、私が今まで感じたのは、ミャンマーではまだ環境問題を人々はあまり意識していないのではないかと思います。私たちの活動が、ミャンマーの人々の負担にならず、ミャンマーの環境や人々に対して良い方向に行くようにこれからも考えていきたいです。

## 植林ツアー体験記

水越由布子  
東洋大学、国際地域学部  
国際地域学科

今回のエコツアーで特によかった点として、現地の人とペアになって植林を行うことにより、交流しながら植林できたことです。植林は私にとって初めての経験であり、さらには現地の人とペアになるということで、ビルマ語を全く話すことができないので、とても不安でした。しかし実際に活動してみると、お互いボディランゲージで意志の疎通ができたので、とても楽しく植林することができました。ただお互いの言語が通じない状況であったので、パートナーがビルマ語で何か話しかけられても、全く理解できないことが何回かありました。そこで通訳の方などに聞きに行かなければならず、もっと植林ツアーに参加する前にビルマ語を勉強するべきであったと感じました。

よかった点の二つ目としては、植林をメインの活動としながらもSHWE DAGON PAGODAやPOPA山などの観光地にも行けたことです。特に夜に訪れたSHWE DAGON PAGODAはライトアップされていて、幻想的でありとても素晴らしかったです。その他のパゴダもどれも長年の歴史を感じさせるものであり、それを見て、感じることをとてもうれしく思います。

また改善すべき点としては、事前に植林についての知識を参加者たちで共有しておくべきではないかと感じました。特に私たちパイナップル・グループは、情報がうまく伝わらずに誤った方法で木を植えてしまったため、それらを直す作業をしなくてはならず、二度手間になってしまい、他の班と比べるとだいぶ遅れをとってしまいました。このようなことを防ぐためにも勉強会を事前に開いて、穴はどの程度掘ったらよいのか、植えた木にどの程度土をかぶせたらよいのか、などを多少なりとも知っておいた方がよいのではないかと思います。

今回のミャンマーでの植林ツアーは私にとって、とても刺激的であり、また自分の視野が広まったように感じました。今後もこのようなツアーがありましたら、ぜひ参加させていただきたいです。

## 植林ツアー体験記：

### 「ミャンマーが教えてくれたこと：一夢、強さ、祈り」

木村 彩子（会社員・一般参加）  
（株） インテージ

ツアー参加のきっかけは、大学院の後輩からの誘いだった。行先はミャンマー。そう聞いた時、少し戸惑ったのが正直なところだ。ミャンマーといえば、軍事政権、何年にもわたる自宅軟禁を強いられている民主派のアウンサン・スー・チーさん。東南アジアで、今後経済成長が認めない国としてあげられるのがフィリピンと、ミャンマー。旧日本軍による横暴の数々。どちらかというとなりのイメージしかない。それでもツアー参加を決めたのは、日本で会社員として生活しながらも、世界の平和や貧困・環境などの問題を身近に感じて、考えていられる人間でありたいと思ったからだ。

今回のツアーで得た最も大きなことは、「自分が本当にやりたいことを、どのようにしたら実現できるのか」という問に対する答えの一つを見つけたことだ。現時点で考えられている「やりたいこと」は、「人と人・人と社会・人と自然のつながりを感じ育む、暮らし・ライフスタイルの提案」である。しかし、これを生業にするには、どのような形にすればよいか、ずっと頭を悩ませていた。その答のひとつと考えられるのが、ツーリズムである。

ツーリズムとは、イズムという言葉が入るように、主催者の理念・考え方が組み込まれた観光を指す。ツーリズムは、主催者側にとって、地元の生活・文化伝統・歴史・自然などを伝える機会・手段であり、地域活性化や自然環境の保護に結び付く。地元以外の土地の生活に入り込む人と、それを受け入れる人の共感を呼び起こす、ツーリズムの可能性を、強く感じるようになった。

このツアーでツーリズム自体を意識するきっかけとなったのは、観光で訪れた、シュエサンダーパゴダのテラスでの、物売りの少年との語ら이었다。私は彼からビルマの本を買ったのだが、ふと、この少年と売り買い以上の会話ができないものかと思い始めた。話しかけると、気軽に受け応えてくれた。彼の名はナンナンウ。お父さんは居なくて、お母さんと住んでいる。家は自転車で40分くらいのところ。この本は近くの商店で仕入れた、などにはじまり、私のボーイフレンドの話から日本の話まで…。パゴダからの夕陽を眺めながらの語らいは、贅沢なものがあつた。他に商品売り付けでもなく、帰り際“Nice meeting you”と握手だけして去って行った。物売りとは観光客以上の関係を築けたことが嬉しかったが、それと同時に彼との「違い」がしみじみと感じられた。あの気さくで賢く、優しい少年は、今日も炎天下の中を自転車で通い、パゴダに登り、観光客相手に物売りをし続けている…と思うと、胸が詰まる想いがする。

「ミャンマー人は2度許す」という諺があるという。温厚なミャンマー人の気質をあらわす言葉だ（3度目は怖いという意味にも取られるが）。ミャンマーで出会った人々は、温かみのある微笑みを湛えた、ホスピタリティに溢れた人ばかりであった。大抵のことを笑って許し、冗談を言って場を和ませたり、相手が楽な状態で居られるよう気を使っている。しかし、国民のだれもが、不条理な政治体制に、不満や怒りを抱えていることは間違いなはずだ。それにもかかわらず、なぜ、思慮深い対応ができるのだろうか。

思わず、通訳のモーさんに、「なぜ、そのようにいつも優しく人に接することができるのですか」と問いかけてしまった。「私はどちらかというとカッとなりやすい性格で、昔は感情をすぐに表に出してしまう人間でした。でも、自分のせいで周りの人に悪い影響を与えたくない。そういう思いから少しずつ努力して見せないようにしてきたのです。」日常的事物だけでなく、政治的なことに関しても負の感情をおくびにも出せない、かつ出さないミャンマーの人の心の中は、私には想像もつかなかった。同時に、自分が大変な状況でも他人を思いやる気持ちをもてる、ミャンマー人の強さに支えられた優しさに改めて感動した。

時折、シェダゴンパゴダで、無言で熱心に祈りを捧げる人々を思い出す。何かを一心不乱に伝えようとしている。祈りとはこのような行為なのか、と感じた。藤村さんのおっしゃる通り、あれがミャンマーの人の本当の姿なのだと思う。顔には笑みを湛えながら、心の中では泣き・怒り、その間で一心に祈る、彼らの生き方が心に焼き付いた。

写真1：右側がナンナンウ。  
左は同じく物売りの少年。



写真2：シェダゴンパゴダで祈りを捧げる人々





## 7. 植林ツアー後記（藤村）

今回の植林ツアーは、昨年の試験的植林の経験を基に実施された、第一回目の本格的植林ツアーであった。第一期生として、学生14名と正会員・社会人5名、計19名が参加したが、この人数バランスは、意図的ではなく、結果的なものではあったが、学生主体のツアーの考え方にぴったり一致していた。社会人が多すぎると、学生さんが萎縮してしまう恐れがあるため、この人数バランスは、ツアー参加者の人間関係を円滑なものとするのに絶妙であったと思われる。

参加していただいた学生さんが3班に別れて、各自の責任分担を積極的に遂行していただいた。当初は戸惑いがあったものの、日を迫うに連れて、植林方法にも熟達し、最終日には極めて要領よく、迅速に植林することができた。今後はこの経験をもとに簡単な植林マニュアルを作成して配布することにしたい。

エコツーリズムは、単なる労働の提供であってもいけないし、親切の押し付けであってもいけない。それは、現地の人々と心の触れ合う交流と理解があつてこそ楽しく有意義なものとなる。MJETは今後とも、日本とミャンマーの青少年が、共同で行う植林と心の触れ合う交流を通じて、理解と親睦を深められるように努力していきたい。

付録 1. 植林ツアー参加者

学年	氏名	所属大学、学科
修士2年	赤木 升	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻
修士2年	中条 真帆	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻
修士2年	木村 明広	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻
修士2年	小林 宗太郎	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻
修士2年	佐藤 麻美	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻
修士2年	前村 ゆう	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻
修士2年	真鍋 希代嗣	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻
修士1年	鵜籠 絢子	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻
修士1年	□□□□	東京大学大学院、新領域創成科学研究科、国際協力学専攻

修士1年	熊谷宣樹	東京外国語大学大学院、言語学科
修士1年	佐伯裕里	東京外国語大学大学院、総合国際学研究科、地域・国際専攻 地域研究コース
学部4年	松山知夏	東京外国語大学、ビルマ語学科

学部3年	水越由布子	東洋大学国際地域学部国際地域学科
------	-------	------------------

修士2年	波多野伸俊	筑波大学大学院、博士前期課程、人間総合科学研究科
------	-------	--------------------------

会長	藤村建夫	ミャンマー日本・エコツーリズム
理事	神田道男	ミャンマー日本・エコツーリズム
会員	野口彩	ミャンマー日本・エコツーリズム
個人参加	福永喜朋	メイ・クォーター・マネージメント・コーポレーション
個人参加	木村 彩子	(株)インテージ

付録 2 植林ツアーの日程表

Date	Day	Leave	Arrive	AM	PM	Overnight stay
8/29	Sat	Narita Bangkok	Bangkok Yangon	Narita/Bangkok TG641:10:45-15:45	Bangkok/Yangon TG305:17:50-18:45	Yangon Beauty Land Hotel
30	Sun			09:00 Practicing Bonodori and songs 12:00 Lunch	14:00 Exchange programme with MJBIA students at the World Buddhist Meditation institute 17:00 Sightseeing in Shwedagon Pagoda	Yangon Beauty Land Hotel
31	Mon	Yangon	Bagan	06:30 W9-009 Move to Bagan 10:00 Sightseeing in Bagan area	14:00 Consultation with the Greening Committee members at the 28 <sup>th</sup> Primary School 16:00 Site observation in Than Sin Kye village	Bagan Thazin Garden Hotel
9/01	Tue			08:00 Preparation and matching with partners	14:00 Planting trees at the site near the pond  17:00 Observing the sunset	Bagan Thazin Garden Hotel
02	Wed			08:00 Planting trees at the old school site	14:00 Planting trees at the old school site	Bagan Thazin Garden Hotel
03	Thu			08:00 Preparation for planting 10:00 Visit to Mt. Popa area	13:00 Observation at Mt. Popa area 16:00 Seeing off the returning students Observing the lacquer ware factory	Bagan Thazin Garden Hotel
04	Fri	Bagan	Yangon	08:00 Planting trees at the compound of the 28 <sup>th</sup> Primary School	15:00 Visit to the Sakura Hotel 17:55 W9-109 Leave for Yangon	Yangon Beauty Land Hotel
05	Sat	Yangon Bangkok	Bangkok	08:30 Visit to JICA-supported projects: Yangon General hospital, Nursing College, Planetarium, Youth Centre, Thuwana Bridge Training Centre	15:00 Free  19: 45-21:30 Yangon/Bangkok by TG306: Bangkok/Narita: TG642: 23:50	(on flight)
06	Sun		Narita	Arrive in Narita at 07:30		